

かごしま 祭時記

行事に興味を持ってもらい 伝統継承の担い手に育てる

加紫久利 伊東 昭建 さん(70)
神社宮司

加紫久利神社は1300年前に国の宮社(式内社)に列格された、薩摩国で最も歴史のあるお社です。創建は不明ですが神代の時代といわれ、2000年前から祭祀が行われていたと伝えられています。神社が継承してきた地域の伝統や文化を次世代に繋ぐため、私どもが中心となり、さまざまな組織を作り、活動を行っています。20年ほど前に結成した「二宮会」もそのひとつで、誰でも参加できます。行事や祭事に興味を持ってもらう。そこから担い手が育ち、伝統が継承されると考えています。

お問合せ:加紫久利神社 TEL 0996-67-2800



↑「牛耕の儀」に登場する猿田彦の神(左)と田の神の面。

出水市 / 下鯖町・加紫久利神社

庭祭

ユーモラスな即興寸劇で 五穀豊穡を祈願する春祭り

「あいやー、こいやいかん。もつときばつてもらわんな(あらー、これはだめだ。もつとがんばつてもらわないと)」。寝そべって動かない牛に困り果てる農夫たち。そのユーモラスなやり取りに、参拝客からどっと笑いが起ります。

これは毎年3月4日、出水市下鯖町にある加紫久利神社で行われる春の例大祭「庭祭」の神事のひとつ、「牛耕の儀」のひとつ。田に見立てた拝殿前の齋場に神を招き、田植え前に牛が田を耕す「牛耕の儀」を行い、稲作の手順を演じて五穀豊穡を祈る祭りです。

「牛耕の儀」では笛と太鼓の音とともに、道案内役の猿田彦の神が、田の神、仔牛、田起こし牛、鼻取りとマンガ(馬鋤)取りの農夫二人を引き連れて現れ、即興でこっけいな掛け合いをしながら齋場を回ります。「三〇〇年から四〇〇年前に始まった神事とされています」と話すのは、加紫久利神社の宮司、伊東昭建さん。起源はもっと古く、「古事記」の天岩戸伝説までさかのぼります。天照大神が八百万の神の笑い

鹿兒島には、古くから受け継がれてきた個性豊かな祭りが各地に残っています。今回はそんな祭りの中から出水市の加紫久利神社に伝わる「庭祭」をご紹介します。

声にひかれて岩戸を開き、闇の世に光が戻った神話と同じように、面白く演じて観衆の笑いを誘い、神様の気をひくのだそうです。

また伊東さんは「春は災害や飢饉が起らないように祈り、秋は実った自然の恵みに感謝することが祭りの目的。そしてその心を守り伝えていく役目もある」と語ります。加紫久利神社では小学生に田植えや稲刈りを体験させるなど、地域の文化を伝承する取り組みも行っています。現在「牛耕の儀」は、30代以上の有志で結成する「二宮会」が守っていますが、「庭祭」を毎年楽しみにする子どもも多く、担い手となる”種“は着実に育っているようです。



出水市

出水市は、平成18年に出水市・高尾野町・野田町が合併して発足した総人口56,107人(平成25年2月1日現在)のまちです。熊本県水俣市に接し、市北西部は八代海(不知火海)に面しています。写真は出水市麓町の武家屋敷群(国の重要伝統的建造物群保存地区)。江戸時代末期の主屋や表門、土蔵、石垣が保存され、その落ち着いた景観が人々の目を楽しませてくれます。